



シートベルトは何の為 ?

最近タクシー中あるいは巡航中などに、ベルト着用サインが点灯しているにもかかわらず、シートベルトを着用していない乗客・乗員が転倒するなどして負傷する事例が後を絶ちません。昨年11月には、JALの長距離運航で、着陸時、客室乗務員と乗客が立ったまま着陸し、その際客室乗務員2名が腰や頸椎などを痛めた事例も発生しています。この事例ではシートベルトが使えなくなった乗客への対処をしている間に着陸に至ったのですが、背景要因は単純ではありませんが、その乗客を支えていた客室乗務員と、その援助をしていた別の客室乗務員がJump Seatに戻る際、既にJump Seatに着席していた客室乗務員にのしかかる形になり、2名が負傷したものです。

規程があるからシートベルトを着用？

もちろん、運航乗務員は離着陸時のシートベルト着用の重要性については十分に認識しています。しかし訓練が簡素化され、旅客へのサービスが強調される環境に置かれた客室乗務員は、時として保安要員としての意識が薄れがちな状況が見受けられるのも事実です。

シートベルト非着用の間人は、それ自体が凶器

これまでの航空事故のなかには、離着陸時の損壊事故はもちろん、タービュランスなど機体の動揺による負傷は、シートベルト非着用の間人が機体の内部構造に打ち付けられたことによるものと、固定されていない物体（ギャレーカートなど）が飛来して衝突したことによるものがあります。そしてこの「固定されていない物体」とは、本事例のように「シートベルトを着用していない人間」も含まれており、実際にそれが原因で、死亡に至った例もあります。

シートベルトは自分の身を守り、他人の身を守る、確実かつ必然な装置

陸上交通の乗用車においては、前席シートベルト チャイルドシートと着用率が上がり、昨今では後席シートベルトの義務化も検討されています。自動車という時速100キロ程度の乗り物で常識となりつつあるものが、外が見えにくい大型の乗り物になると、例え時速800キロ（エネルギーにすれば64倍）になっても感覚が鈍くなってしまいませんか。この危険性・重要性について、今一度全ての航空機乗務員に周知することが必要になってきているのかもしれない。